

# 生巧館木口木版

—銅版かと思紛う作品群—



図1 エミール・アダン「一日の終わり」版刻

比較的新しく国文学研究資料館に収蔵した、近代日本の出版文化における重要資料を紹介する。明治の日本に新しい印刷技術をもたらした生巧館による、木口木版の清刷、校正刷である。これらは、各種出版物の表紙絵・口絵・挿絵となった。

日本では、浮世絵に代表されるように、版材に桜を用いて、木を縦方向に切った面を彫刻刀で彫る、板目木版が行われてきた。一方、木口木版は、十八世紀末にイギリスのトーマス・ビューイックが発明したとされる。同じ凸版である活版に組み込んで文字と図版を同時に印刷できたことから、ヨーロッパでは書籍の挿絵として発展した。版材としてはツゲなどの硬い木材が用いられ、銅版と同じくビュラン鑿を使って彫られる。板目木版と違って、大きな版木は得られないが、精巧な彫版が可能になる。



図2 『理科入門 有用之動植物』第一編口絵清刷

生巧館とは、明治時代西洋木版画の父といえる合田清が、洋画家である山本芳翠とともに設立した木口木版製作所兼画学校である。合田は一八八〇（明治十三年）年、渡仏し、当時渡仏中だった芳翠のすすめで西洋木版の研究を始めた。パリで、木版の大家のシャルル・バルバンの工場で学び、その後アンリ・ティリアのもとで職工となり、約六年間にわたり腕を磨いたという。一八八六（明治十九）年には、エミール・アダンの絵画「一日の終わり」を木口木版に彫刻し、フランス美術家協会のサロンで入選を果たした。

合田は一八八七（明治二十年）年、帰国にあたり、その作品の電気銅板を持ち帰り、生巧館の広告として使った（岩切信一郎『明治版画史』吉川弘文館、二〇〇九）。図1はその同じ作品である。

桜田本郷町に開業した生巧館は、一階が合田の指導のもとに木口木版工房、二階が芳翠指導のもとになる画学校としていた。設立したばかりの明治二十年に、最初の仕事が入った。『高等小学読本』巻之一（文部省編輯局、明治二十一年）である。印刷会社の秀英舎創立者の佐久間貞一が、文部省編輯局長の伊沢修二を説得したらしい（丹尾安典『近代の彫刻・合田清』『日本の木口木版画』板橋区立美術館、一九九三）。

図2は、『理科入門 有用之動植物』第一編（金港堂書籍会社編輯、明治二十四年）に用いられた清刷りである。サインが見られる。原画を五姓田芳柳が画いたことを意味する。生巧館はすでにブランドになっていた。

（野網摩利子）